

日蓮大聖人御書全集

しもんぶつじょうぎ

始聞仏乗義

新版
1325
ゝ
1328

しもんぶつじようぎ

始聞仏乗義

けんじ

ねん

がつ

にち

さい

ときじょうにん

建治 4 年 ('78) 2 月 28 日

57 歳 富木常忍

せいふしちゆい

かしゅう

こうしゅう

おく

おんごころざし

ひも

青鳧七結、下州より甲州に送らる。その御志、悲母の

だいさんねん

あいあ

ごこうよう

第三年に相当たる御孝養なり。

と

しかん

みようじよう

ぜんだい

き

問う。「止観の明静なることは、前代にいまだ聞かず」

ごころ

の心いかん。

こた

えんどんしかん

答う。円頓止観なり。

と

えんどんしかん

ごころ

問う。円頓止観の意いかん。

こた

ほつけざんまい

いみよう

答う。法華三昧の異名なり。

と ほつけざんまい ところ
問う。法華三昧の心いかん。

こた そ まっだい ほんぷ ほけきよう しゆぎよう ところ ふた あ
答う。夫れ、末代の凡夫、法華經を修行する意に二つ有

いち じゆるいしゆ かいえ に そうたいしゆ かいえ
り。一には就類種の開會、二には相對種の開會なり。

と な い
問う。この名は、いづれより出ずるや。

こた ほけきようだいさん やくそうゆほん い しゆ そう たい しよう
答う。法華經第三の藥草喩品に云う「種・相・体・性」

しじ しじ なか だいいち しゆ いちじ ふた
の四字なり。その四字の中に第一の「種」の一字に二つあ

いち じゆるいしゆ に そうたいしゆ じゆるいしゆ しゃく
り。一には就類種、二には相對種なり。その就類種とは、釈

い ところ あ しよういん たね いつく
に云わく「およそ心有るものは、これ正因の種なり。一句

ずいもん りよういん たね こうべ た て あ
を随聞するは、これ了因の種なり。頭を低れ手を挙ぐる

は、これ縁因の種なり」等云々。その相對種とは、煩惱と業えんいん たね どううんぬん そうたいしゆ ぼんのう ごうと苦との三道、その当体を押さえて法身と般若と解脱と称くさんどう とうたい お ほっしん はんによ げだつ しょうする、これなり。

その中に、就類種の一法は、宗は法華經に有りといえどなか じゆるいしゆ いっぱう しゆう ほけきよう あも、少分はまた、爾前の經々にも通ず。妙樂云わくしょうぶん にぜん きようぎよう つう みようらくい

「別教はただ就類の種のみ有つて、相對無し」云々。このべつきよう じゆるい たね あ そうたいな うんぬんしやく べつきよう い もと べつきよう にぜん えん

釈に別教と云うは、本の別教にはあらず。爾前の円、あ

るいは他師の円なり。また、法華經の迹門の中、「舍利をたし えん ほけきよう しやくもん なか しやり

供養す」已下二十余行の法門も、大体就類種の開会なり。くよう い げにじゆうよぎよう ほうもん だいたいじゆるいしゆ かいえ

と

そうたいしゅ

こころ

問う。その相對種の心いかん。

こた

しかん

い

えん

ほう

き

しょうじ

答う。止觀に云わく「いかなるか、円の法を聞くこと。生死

そくほっしん

ぼんのうそくはんにや

けつぎようそくげだつ

き

みつ

なあ

即法身・煩惱即般若・結業即解脱なりと聞く。三つの名有

みつ

たいな

いったい

みつ

りといえども、三つの体無し。これ一体なりといえども、三

な

た

みつ

すなわ

いっそう

じつ

こと

つの名を立つ。この三つ即ち一相にして、その実、異なり

ほっしん

くきよう

はんにや

げだつ

くきよう

あることなし。法身、究竟なれば、般若も解脱もまた究竟な

はんにや

せいじよう

よ

せいじよう

げだつ

じざい

り。般若、清浄なれば、余もまた清浄なり。解脱、自在な

よ

じざい

いっさい

ほう

き

れば、余もまた自在なり。一切の法を聞くこと、またかく

みな

ぶつぼう

ぐ

げんしよう

のごとし。皆、仏法を具して、減少するところなし。これ

えん き な どううんぬん しやく すなわ そうたいしゅ
を円を聞くと名づく」等云々。この釈は、即ち相對種の

てほん
手本なり。

こころ
その意いかん。

こた しょうじ われ く か えしん ごおん
答う。生死とは我らが苦果の依身なり。いわゆる五陰・

じゅうににゅう じゅうはつかい ぼんのう けんじ じんじや むみよう さんわく
十二入・十八界なり。煩惱とは見思・塵沙・無明の三惑な

けつごう ごぎやく じゅうあく しじゅうとう ほつしん ほつしんによらい
り。結業とは五逆・十悪・四重等なり。法身とは法身如来、

はんにや ほうしんによらい げだつ おうじんによらい われ しゅじょう むし
般若とは報身如来、解脱とは応身如来なり。我ら衆生、無始

こうごう このかた さんどう ぐそく いま ほけきよう あ さんどう
曠劫より已来、この三道を具足し、今、法華經に値つて三道

そくさんとく
即三徳となるなり。

難じて云わく、火より水出でず、石より草生ぜず。悪因

あつか かん ぜんいん ぜんぼう しょう ぶつきよう さだ なら

は悪果を感じ、善因は善報を生ずるは、仏教の定まれる習

われ こんぽん たず きわ ふぼ

いなり。しかるに、我らその根本を尋ね究むれば、父母の

しょうけつ しゃくびやくにたいわごう いっしん あく こんぽん ふじよう

精血、赤白二滯和合して一身となる。悪の根本、不浄の

みなもと たいかい かたむ あら しょうじよう

源なり。たとい大海を傾けてこれを洗うとも清浄なる

く か えしん こんぽん さぐ み

べからず。また、この苦果の依身は、その根本を探り見れ

とん じん ち さんどく い ぼんのう く か にどう

ば、貪・瞋・癡の三毒より出ずるなり。この煩惱・苦果の二道

ごう さま ごうどうすなわ けつばく ほう たと

によつて業を構う。この業道即ちこれ結縛の法なり。譬え

かご い とり さんどう

ば籠に入れる鳥のごとし。いかなぞこの二道をもつて

さんぶつ しょう

たと

ふん あつ

せんだん つく

三仏因と称するや。譬えば、糞を集めて梅檀を造れども、

つい かんば

終に香しからざるがごとし。

こた

なんじ

なん

おお

どうり

われ

わきま

答う。汝が難、大いに道理なり。我、このことを弁え

ふほうぞう

だいじゅうさん

てんだいだいし

こうそ

りゅうじゅ

ず。ただし、付法蔵の第十三、天台大師の高祖たる竜樹

ぼさつ

みようほう

みよう

いちじ

しゃく

たと

だいやくし

よ

菩薩、妙法の妙の一字を釈して、「譬えば、大薬師の能く

どく

くすり

とううんぬん

どく

なにもの

毒をもつて薬となすがごとし」等云々。「毒」というは何物

われ

ぼんのう

ごう

く

さんどう

くすり

なにもの

ほつ

ぞ、我らが煩惱・業・苦の三道なり。「薬」とは何物ぞ、法

しん

はんにや

げだつ

よ

どく

くすり

なにもの

身・般若・解脱なり。「能く毒をもつて薬となす」とは何物

さんどう

へん

さんとく

てんだい

みよう

ぞ、三道を変じて三徳となすのみ。天台云わく「妙は

ふかしぎ な とううんぬん

不可思議に名づく」等云々。また云わく「夫れ、一心乃至

ふかしぎきょう こころ あ とううんぬん そくしんじようぶつ もう

不可思議境、意ここに在り」等云々。即身成仏と申す、

きんだい けごん しんごんとう ぎ ぬす と

これはこれなり。近代の華嚴・真言等、この義を盗み取つ

わ もの だいちゆうとう てんか ぬすびと

て我が物となす。大偷盜、天下の盜人これなり。

と い ぼんぷ くらい ひほう こころ し

問うて云わく、凡夫の位もこの秘法の心を知るべきや。

こた わたくし こた せん な りゆうじゆぼさつ だいろん くじゆうさん

答う。私の答えは詮無し。竜樹菩薩、大論へ九十三な

い いま ろじん あらかんかえ さぶつ い

り」に云わく「今、『漏尽の阿羅漢還つて作仏す』と言うは、

ほとけ よ し ろんぎしや まさ ろん

ただ仏のみ能く知ろしめす。論議者は正しくそのことを論

はか し あた ゆえ まさ けろん

すべきも、測り知ること能わす。この故に応に戲論すべか

らず。もし仏ほとけを求め得る時もと う とき、乃ち能く了知すなわ よ りようちす。余人は信よにん しんず

べきも、しかもいまだ知るべからず」等云々。この釈しやくは、

爾前にぜんの別教べつきようの十一品じゆういつぽんの断無明だんむみよう、円教えんぎようの四十一品しじゆういつぽんの断無明だんむみよう

の大菩薩だいぼさつ、普賢ふげん・文殊等もんじゆとうもいまだ法華經の意ほけきよう こころを知らず、い

かにいわんや藏・通二教ぞう つうにきようの三乗さんじようをや、いかにいわんや末代まつだい

の凡夫ぼんぷをやという論文ろんもんなり。

これをもつて案ずるに、法華經の「ただ仏ほとけと仏ほとけとのみ、

いまし能く究尽よく くいじんしたまえり」とは、爾前にぜんの灰身滅智けしんめつちの二乗にじようの

煩惱・業・苦ぼんのう ごう くの三道さんどうを押さえて法身・般若・解脱ほっしん はんによ げだつ とと説くに、

にじようかえ

さぶつ

ぼさつ

ぼんぷ

しやく

二乗還つて作仏す、菩薩・凡夫もまたかくのごとしと釈す

ゆえ

てんだい

にじよう

こんぱい

な

どく

るなり。故に、天台云わく「二乗の根敗、これを名づけて毒

こんきよう

き

う

すなわ

どく

へん

くすり

となす。今經に記を得るは、即ちこれ毒を変じて藥とな

ろん

い

よきよう

ひみつ

ほつけ

ひみつ

す。論に云わく『余經は秘密にあらず、法華はこれ秘密な

とううんぬん

みようらくい

ろん

い

だいろん

り』と「等云々。妙樂云わく『論に云わく』とは大論な

うんぬん

り」云々。

と

問う。かくのごとくこれを聞いて、何の益有るや。

こた

い

はじ

ほけきよう

き

みようらくい

答えて云わく、始めて法華經を聞くなり。妙樂云わく「も

さんどうすなわ

さんどく

しん

よ

にし

かわ

わた

し三道即ちこれ三徳と信ぜば、なお能く二死の河を渡る。

いわんや三界をや」云々。末代の凡夫、この法門を聞けば、

さんがい
うんぬん
まつだい
ぼんぷ
ほうもん
き
われいちにん

じょうぶつ

ふぼ

そくしんじょうぶつ

ただ我一人のみ成仏するにあらず、父母もまた即身成仏

だいいち

こうよう

せん。これ第一の孝養なり。

びょうしん

ゆえ

いさい

もう

病身たるの故に委細ならず。またまた申すべし。

けんじしねんたいさいつちのえとらにがつにじゅうはちにち

にちれん

かおう

建治四年太歳戊寅二月二十八日

日蓮

花押

富木殿

ときどの